

ペフトーク第4回「open talk」こぼれ話

2018年のイベントBEST

masamichi furukawa

なぜいくつになってもライブや催しに行ってしまうのか。現在はいつでもオンラインで見れるものより、そこでしか体感できないものに私たちは価値を覚えるから、とはよく言われるが、私にはもう一つ理由があって、それは非言語的な時間を過ごしたいからである。私は仕事でも家でも休日でも現代人はほぼ言語的な空間に晒されていると思っていて、その踏み外せなさがしんどい。例えば、ちょっと言葉を間違えるだけで、気分を悪くさせたり、それをまた気にしたり、人の印象が左右したり。そういうわけで自分はライブやイベントでの非言語ものに浸る時間が楽し、体が欲してしまうのである。

あと、昔ライブは好きなバンドやアーティストを見る事に価値があったけど、年のせいか内容の良さが担保されているものに魅力を感じなくなってきた。といってもシュールだ、カオスだ、スクラムだみたいな極に行くのも違って、何かその中間的な領域の中で何かふいに生じる感動や過去になかった感覚といった、予期せず訪れるものが自分にとって「今日生きてここに来て良かった」と思えるものになっている。このベストはそんな見方での選出となっています。

1位

3月17日

GEIST

クリエイティブセンター大阪 BLACK CHAMBER

作曲 日野浩志郎

出演者 Eli Keszler／山本達久／川端稔／中川裕貴／安藤暁彦／島田孝之／中尾眞佐子／石原只寛／亀井奈穂子／清造理英子／横山祥子／大谷滉／荒木優光

日野氏のキャリアのひとつの到達点だと感じ、感動した。インスタレーションとも舞台芸術とも単なるライブともまた違う体験。演奏者はほぼ姿を見せず、サラウンドでどこからどういう音が来るのかも予測できない。Eli Keszlerと山本達久のツインドラムだけが見えるように左右に配置され、その見せ方とその掛け合いにもグッときた。そんなに頻繁にでなくて良いので3年に1回くらい、これ級のものが観てみたい。こういう事ができる人はそういない。

2位

6月17日

野外展示「音羽川百景」

フィールドレコーディング再生 荒木優光／ライブ 小松千倫

京都 左京区 音羽川砂防ダム周辺

全員、あの世に行ってしまったような、ポスト・ポスト・レイブとでも言えばいいのか。昨年一番、何とも言いようがなかった催し。主催の方は色々意図があつての事だと思うが、私にはこんな場所でなぜこんな事をしているのかさっぱり分からず、こういう事こそ現代人に与えられた贅沢

な時間である、と終始ニヤニヤしていた。小松氏にはフィールドレコーディング現地生成とドローン・ノイズを大自然でやるような催しをやって頂きたい。

3位

9月12日

Oneohtrix Point Never - Myriad TOKYO
Shibuya O-East

プロモーション、コンセプト作りにおいて2018年、一番オタクさが光っていた。翌日にトーク・イベントもあり複合的に楽しめて良い時間だった。ロパティンが伝えたかった真意が分からず、何とか理解したいと色々調べていたが、その行為自体が、私的な事で完全に気力がなくなっていた自分へのカンフル剤となり大変救われた。OPN「Age Of」の着想元になった「2001年宇宙の旅」も同年IMAX版で公開されたが、（やはり俺の居場所はここや...）とパーソナルな感動に包まれ、とにかく再起動しなくてはという気持ちにさせてくれた。

4位

6月からだいたい毎月ペース

坂口卓也 LAFMS塾 計6回（現在）

Futuro Cafe

LAFMS日本研究家の第一人者・坂口卓也先生による既成概念から逸脱せんと様々な表現に立ち向かったLAFMSのミュージシャンの連続講義。Futuro Cafeの雰囲気のエえ塩梅の中、坂口氏のこれまたええ塩梅の語り口調にハマってしまいほぼ毎回参加している。お客さんはマニアっぽいおっちゃんらがレギュラーで、特に交流する事もないが、熱心なものの好きだけが集まっている感じが良い。客数や盛り上がりなど全くどうでも良く、ただ面白い音楽と坂口氏の話に耳を傾ける時間が大変贅沢である。自分もこのような域の催しが出来たら良いなと憧れる。

5位

12月2日

Melon with Foul Goats
-放談NURSE WITH WOUND and United Dairies-

平山悠／John Podeszwa (Seal Pool)／司会進行：東瀬戸悟 (Forever Records)

FUKUGAN GALLERY

国内屈指のNWW研究家・平山悠氏のトーク・イベント。平山氏はお若いのにしっかり根をおろされNWW、カレント93、コイルあたりの掘り下げ方は相当エグい。今回は何とアイルランドのステイヴ・ステイブルトンの家にまで取材に行かれたレポートがあり、現地のプライベート感あふれる写真や話がじわじわ来た。平山氏は出版物もなかなか常人が作れるレベルでなく、シーンや流行とは全く関係なく、内なる自分に向き合い好きな事を深めているテイストが好きだ。孤独な人（悪い意味ではない）って分かる。

次点

4月1日

ANTIBODIES presents ALVIN LUCIER & Ever Present Orchestra
京都大学 西部講堂

現代音楽の旨味が詰まった内容で、ALVIN LUCIERという伝説的なアーティストを日本で観れる（おそらく最後の）貴重な公演。それ自体は素晴らしかったが、かなり人が多く、携帯が鳴ったり演奏が始まってもしゃべりをやめない人がいたり、物音がしたりと残念。アンチボの人脈でここまで集客できていたのだと思うが、正直こういう内容を見たい人がどれくらい来ていたのか疑問である。終演後は1万なんぼのBOXを買ってサインをもらうくらいにファンになっていた。

12月9日

King Crimson 「UNCERTAIN TIMES JAPAN TOUR 2018」
グランキューブ

一生に一度はロバート・フリップのギターを生で聴いておきたいと思い16000円という普段絶対買わないチケ代を投入。会場には普段見ない金を持っていそうなおっさん達で溢れていてグッズなども大いに売れていた。ライブはすごいなと思ったが感動はなかった。アップデートの仕方が、より上質に、ファンを納得させる（値段に応える）という大半のベテランが向かう様式美の域を出るものではないと感じたのだ。しかし1970年代の洋楽ロック・ファン層を目の当たりに出来た事、そして彼らを夢中にさせたKing Crimsonという恐竜を体感できた事は収穫だった。

8月18日

川崎弘二『武満徹の電子音楽』刊行記念
メディア・パフォーマンスとしての『武満徹の電子音楽』
with 伊村靖子（情報科学芸術大学院大学講師）
スタンダードブックストア心斎橋

本が高すぎて買えないので話だけでもと聞きに行った。武満徹は日本万国博物館の「鉄鋼館」でも産まれる5年前だし正直全然分かってないのだが、一人のアーティストの記録をここまで網羅する、という点で私には著者の川崎弘二氏が興味深い。武満話では、若い頃の坂本龍一が、わざわざコンサート会場前で武満批判のビラを巻いたというエピソードが好きで、最近のMikikiのインタビューでその詳細が載っていて面白かった。あと細かい話、今ペフでやっているトークでのスライド作りに関して、この時に川崎氏に教えて頂いたので感謝している。